



Title	David Piachaud教授について
Author(s)	高山, 武志; TAKAYAMA, Takeshi
Citation	北海道大學教育學部紀要, 53, 25-25
Issue Date	1989-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29330
Type	departmental bulletin paper
File Information	53_P25.pdf



David Piachaud 教授について

高山 武志

A Record of Professor David Piachaud

Takeshi TAKAYAMA

デヴィット・ピアショウ教授は、1945年生れで、オックスフォード大学、ミシガン大学大学院で学び、その後、英国の保健・社会保障省（the Department of Health and Social Security）に勤務し、1970年にロンドンスクール・オブ・エコノミクス（LSE）の講師に就任した。1987年に教授に昇格、現在、社会行政学部（the Department of Social Administration）の学部長として活躍している。

同教授の主たる関心領域は、社会保障、所得分布、社会政策と経済政策の関連等についてである。同教授が立証したミーンズ・テストと税制との矛盾を指摘した‘貧困のわな’（poverty trap）は、日本にも紹介され学界に定着した用語となっている。この他、児童貧困（child poverty）の原因と範囲、母子家族、社会保障の国際比較等多数の実証がある。理論分野では、タウンゼント（P. Townsend）教授との間に交わされた貧困概念についての論争が有名である。

同教授は、また広い国際的視野をもっており、1980年4月から2ヶ月間、日本学術振興会外国人研究員として日本に滞在し、北海道大学教育学部教育計画研究室をベースとして、日本の社会福祉、社会保障、貧困児童の問題等を研究するとともに、北大をはじめ全国各地の大学、研究祈で講義、講演をしている。日本の他、オーストラリア、インド、ニュージーランド、パキスタン、スーダン、ゾンビア等で調査、講義をしている。

同教授は、現在主として、最近の社会保障制度の変化がもっている意義あるいは社会保障と雇用政策の関連等について研究を進めている。